

2002年(第13回)福岡アジア文化賞 受賞者フォーラム

「Asia, My Global Community」 アジア、地球社会

【日 時】2002年9月21日(土) 13:30～15:30

【会 場】アクロス福岡イベントホール(福岡市中央区天神)

【出演者】

・受賞者

張 芸 謀	(大 賞)
キングスレー・ムトゥムニ・デ・シルワ	(学術研究賞)
アンソニー・リード	(学術研究賞)
ラット	(芸術・文化賞)

・コーディネーター

小倉 貞男(中部大学国際関係学部教授)



受賞者フォーラム

小倉貞男 世界を覆うグローバル化の波の中で、アジアも激動の時代に突入しています。特にアジアの場合、伝統や文化が圧迫され、混乱し破壊される時期に入っています。私たちのコミュニティは、グローバル化の中で孤立して生きているわけではありませんから、グローバルな視点で、それぞれの地域が健全な発展を遂げなければならない時代でもあります。我々には、創造性をもって我々のグローバルコミュニティを建設していかなくてはならないという、一人の人間としての責任があります。今日は受賞者の方々に、そういった話を柔らかくフランクに友好的にお話し願えればありがたいと思います。

ラットさんの顔を見るとカンボンボーイ、ガキ大将という印象を持ちますが、子どもの頃はカンボン(村)でどんなふうにご過ごされたのでしょうか。

ラット 私はマレーシアのペラ州のカンボンで生まれました。電気もない村です。当時の様子を知っていただくために、9歳の頃のお話をしたいと思います。モスクにお祈りをしに行った後、普段は自転車に乗って家路につくのですが、あるとき、年長の子どもが「今夜は別の場所に行くぞ」と言いました。後をついて行った先は別の村で、ちょうど婚礼の宴会の準備をしているところでした。私たちが自転車から降りて、ある家の前に立つと、おとなが私たち一人一人に仕事を割り当てました。皿を並べたり、料理を手伝ったり、テーブルを用意したり、いろいろでした。大きな子は、より重い仕事を手伝いました。私はようやく、自分たちは仕事をもらうためにそこに行ったのだとわかりました。また、披露宴は男の子が女の子に出会う唯一のチャンスでもありました。村では、女の子に「やあ」とは言えても、「こっちに来いよ」とは絶対に言えませんでした。披露宴の集まりでは、女の子は制服ではなく民族衣装を着ていて、とてもきれいでした。

現在では、子どもたちが披露宴の準備を手伝うことはありません。小さな町に住んでいても大きなホテルから料理を配達させ、若者たちや子どもたちはゲストとして出席するだけです。ずいぶん変わったものだと思います。その後、私は町に出てマンガ家になりましたが、そういう背景をもとにして、今、物語を生みだしています。

小倉 リードさんのお父さんは外交官だったそうですが、子どもの頃のリードさんはどんなふうでしたか。

アンソニー・リード 振り返ってみると、私自身もグローバルな子どもだったと思います。悪名高き外交官子弟として、幼少の頃から世界中を引きずり回されていました。自分がグローバル化のプロセスの一部であったと言うのは簡単ですが、ある意味では深く傷つく経験でもありました。一緒に遊んでいる仲間から、突然引き離されてしまうのは胸の痛むことでした。引っ越しのたびに不自由しましたが、結果的には非常によかったと思っています。

最初の引っ越しは4歳のとき、太平洋戦争が終結する前でした。父がワシントンに駐在していたので、カリフォルニア行きの米軍の輸送艦隊とともに太平洋を越えました。新しい学校では、自分の発音をからかわれてつらい思いもしましたが、それは子どもにはよくあることです。より大きな

影響を受けたのは、その後です。二度目は12歳のときで、インドネシアのジャカルタに両親と6か月住みました。三度目は18歳のとき、一人で日本へ行き、そこに駐在していた両親を訪れました。5週間程でしたが、そのときのことは自分にとって大変なチャレンジだったと記憶しています。振り返ってみると、10代の初めと終わりにおけるインドネシア滞在と日本訪問は、私に衝撃を与え、意欲をかきたて、おそらく人生の方向性を変えたと思います。

これらの場所は、自分の住んでいたところとは違っていました。私が住んでいたニュージーランドは、どちらかというと同質的でした。みんなが英語を話し、裕福でも貧乏でもなく、比較的平等で快適なところでした。だから私の最初の発見は、いかに人間が互いに異なっているかということでした。まず言語が違うので、言語の壁を乗り越えて理解するためには、非常に大きな努力が必要です。また、食事・衣服・生活様式などすべてが、自分が生まれ育った世界に対して疑問を投げかけてきました。これは他者との差異の理解に関わるものであり、自分が人生をかけて取り組むべき研究課題だと思いました。

この二つの地域で次に衝撃を受けたことは貧困でした。当時(1957年頃)の日本はまだ貧しくて、物乞いがいました。東京で初めて物乞いに会ったとき、非常に困惑したことを覚えています。インドネシアで会ったときも心を乱されました。少なくとも自分はちゃんとした洋服を着て、ちゃんと眠るところもあるのに、彼は何も持っていないのです。年月が経つにつれて、こういったことにも慣れてきましたが、その当時の困惑は生涯の記憶として残っています。

小倉 デ・シルワさんは、スリランカで初めて自由な総選挙が行われたのと同じ年に生まれたから、民主主義の申し子だと言われているのではないかと思います。あの頃はスリランカも戦争が始まって大変だったでしょうね。

キングスレー・ムトゥムニ・デ・シルワ 私と普通選挙を結びつけるのは面白いですね。確かに私は、スリランカで初めて普通選挙法のもとで総選挙が行われたのとはほぼ同じ時期に生まれました。ただ、そのことは青年になるまで、自分に影響を与えることはありませんでした。私は人生のほとんどを小さな町で暮らしてきました。多くの人々が住みたがり、他の地域に出て行ってもまた戻りたくなるような魅力的な町でした。そんな町で最初の変化が起きたのは、1941～1942年頃、イギリスが退却した時期です。私の住んでいた町は、数百人ものイギリス人兵士やオーストラリア人兵士、後に加わったアメリカ人兵士の存在によって変容してしまいました。しかし、駐留軍と地元民との間の緊張が高まることはありませんでした。お互いにかかわり合わないようにはしていたからです。

1944年頃、スリランカが連合軍の東南アジア指令部の本部になると、状況は複雑になってきました。国家が所有する大きな建築物は、実質的にすべて東南アジア指令部の一部となったため、人々の負担も大きくなりました。ホテルでさえ東南アジア指令部に接收されました。

当時の主な記憶は、次の三つのことです。まず、慣れ親しんだ食料を手に入れることがだんだん困難になり、生活が次第に不自由になっていきました。その頃から人々はパンを食べるようになりましたが、それは地元の食物ではありませんでした。二番目に、生活の変化を個人レベルで実感するようになりました。私たちは王立植物園と呼ばれる広い芝地で、よくクリケットを楽しんでいたのですが、ある日、警官が理由もなく「だめだ、出ていけ」と言いました。三番目は、見なれた庭園にさまざまな車が乗り入れてきたことです。車には背の高いハンサムな士官が乗っていました。

何年も後に、彼がルイス・マウントバッテン卿だったことを知りましたが、当時は人々に命令を下しにやって来る制服の白人の一人にすぎませんでした。マウントバッテンは、傲慢にもキャンディにある総督の優雅な邸宅を接收して住んでいました。気の毒な総督は、キャンディでは彼と一緒に総督邸に住むか、他の場所に住まざるをえませんでした。

これが、私の子ども時代の思い出です。

小倉 張芸謀さんの子どもの頃のお話をお伺いしたいと思います。

張芸謀 小さい頃は西安に住んでいました。中学生のときに文化大革命が始まり、父親が国民党の将校だったので、すぐに反革命ということになりました。紅衛兵が、しょっちゅう家捜しにやって来て、父を押さえつけ、ありとあらゆるものを持って行きました。その後、農村へ下放されました。両親と私と弟2人の5人が、それぞれ違った所に行かされました。農村での生活は、わりあい愉快でした。農家の人たちは、私がどないきさつで来たのが気にせず、とてもよくしてくれたので、都市にいたときの政治的な恐れはなくなりました。私はこれまで映画でたくさんの農民を撮りましたが、この頃の生活と関係があると思います。16歳から3年間農村にいて、その後、工場へ行って7年間働き、27歳で大学に行き始めました。私たちの時代の若者は、みんなこのような経歴を持っていました。この10年間の経験は、とても重要だったと思います。たくさんの苦しい経験は、私たちが作品を創造するうえでの財産になったと思います。

10年間の文化大革命が終わって、正常な試験制度が復活したとき、私はとても大学に行きたいと思いました。卒業証書が欲しかったのです。大学を出れば仕事探しやすくなり、自分の境遇を変えられると思いました。体育学院や美術学院や農業学院を受けたいと思いましたが、全部ダメで、もう諦めようと思っていたとき、友達が「君は写真が上手だから映画学院の撮影科を受けたらいい」とアイデアを出してくれました。しかし、年齢オーバーでこれもダメでした。しかし、また友達が「文化部の部長に手紙を書け」と知恵を出してくれました。文化大革命終結直後は、庶民が指導者に直接手紙を書くことが流行になっていました。私は部長に手紙を書き、自分で撮った写真を同封しました。文化部長は、絵を描く人だったので芸術がわかり、特別許可が出て、試験、身体検査、政治審査なしで入学できることになりました。映画学院は同意しませんでした。部長が怒って机を叩いたので、しかたなく私を受け入れたようです。それで私はその年、数十万人の学生の中でも最も特別な一人になりました。しかし、入学してすぐ、私の入学を不満に思っていた先生たちが、部長に抗議をしました。私はメンツがなくなり、学校にいたくなくなりました。大学での4年間、やめたいという思いはずっと頭を離れませんでした。それでも、なんとか頑張り通せたのは、映画に対する愛情からではなく、何とかして卒業証書を手に入れたいという思いからでした。

こういう特別な経緯によって、私の一生が変わりました。

小倉 リードさんは授賞式のあいさつで「私はアジアの外から見ている」とおっしゃいましたが、私はリードさんはアジアの人間だと見ています。その件に関して、いかがでしょうか。

リード 自分がアジアの人間だという発想は、後から出てきたものだと思います。おそらく1970～1980年代に始まった新しい考え方で、特にオーストラリアの人々がそう熱望するようになってきました。私がニュージーランドで育った頃には、「我々はアジア人だ」という感覚はあまりなく、「我々

はアジアに近い」と言っていたと思います。

当時は、ニュージーランドの快適な世界と、日々、新聞で読む貧困や政治的混乱や問題に満ちた東南アジアの世界は、私たちから遠くにあるわけではないけれども、その二つの間には、はっきりした違いがあるという感覚がありました。私にとっては、特に高校時代の終わりから大学時代を通して、アジアというのは取り組むべき課題でした。貧困と「違っている」感覚は、私にとってとても重要であり、この両方の要素が東南アジア、特にインドネシアに集中していました。なぜならインドネシアは政治と経済の問題をたくさん抱えていたからです。それは私たちが対処すべきことのように思えました。それで私と同世代の人間の多くが、この地域を理解し、何かをしたいと思い、この地域と私たちの関係についても知りたいと思っていました。

私が大学へ行った1950年代にコロポ計画が開始されました。アジアと関わりのある周辺の国々のグループが、奨学金制度を通じて、恵まれない国の人々の勉学を援助するもので、ニュージーランドにとっては全く新しいものでした。以前は外国人留学生など全然いませんでしたが、1957年から、私の大学でも東南アジアの留学生を受け入れ始めました。特にニュージーランドでは、サラワクとサバの留学生を受け入れていました。その地域は、当時マレーシアの一部ではなく、政治的にどの方向へ行くのかも明白ではない非常に小さい国だったので、同じく小国であるニュージーランドとしては、彼らを援助することで何らかの違いが出てくるのではという期待がありました。私のクラスにも、後にサラワクやサバの指導者になった学生たちがいました。彼らは素晴らしい人々で、私は大いに彼らと交流しました。私が彼らにニュージーランドの環境を理解する手助けをし、彼らは私が東南アジアを理解する手助けをしてくれました。そのことが、東南アジアの存在感を高める契機になったと思います。

後に、私はイギリスで博士号を取得し、最初の職をマレーシアで得ました。そして、東南アジアを研究するには、ニュージーランドにいては少し遠すぎるということが次第にわかってきて、その後はオーストラリアで仕事をするようになりました。しかし、自分がニュージーランドの人間か、オーストラリアの人間か、アジアの人間かということは、あまり気になりません。基本的に、私は人間であって、それが最も大事なことです。

小倉 ラットさんは子どもの頃、家から出てしまったそうですね。

ラット 家から出たわけではありませんが、10歳のときに村からイポーという町へ引っ越し、イングリッシュ・スクールに通いました。その方が、将来的に自分にとってはよいことでした。しかし、イポーの小さな町では何も起こらず、いつも退屈でした。12～13歳の頃には、人より目立ち、特別な存在になりたいと思うものです。私も何かでみんなに自分を印象づけたくて、絵を描き始めました。先生や友達は、みんな私の絵を喜んでいるようでした。父の励ましで私はたくさんの絵を描くようになり、マンガファンになりました。そして、ペナンの出版社や娯楽雑誌や映画雑誌などに自分のマンガを送りました。作品が掲載されると無料の映画チケットをもらえました。シンガポールの映画雑誌にも子どもっぽいジョークを送って、何枚もチケットを受け取りました。

自分のマンガが初めて雑誌に掲載されたときは、本当に感動し体が震えました。最近では、こういった感情を味わうことはめったにありません。そうやって絵を描き続け、最後は新聞に描くようになりました。1960年代後半に新聞に連載するようになり、クアラルンプールの新聞社に記者とし

ての仕事を得ました。1970年にクアラルンプールに移り、犯罪記事担当記者になりました。4年間やっても文章は上手になりませんでした。いろいろな人と会ったおかげで絵はうまくなりました。そうしてクアラルンプールの生活について学び、絵を描くことは人間に共感することだと悟ったのです。

小倉 絵の中によく子どもたちのユーモラスな姿が描かれているのは、なぜですか。

ラット 子どもは簡単に質問を投げかけるからです。私の風刺マンガは、一枚のマンガで社会を批評しています。街頭でも、居間でも、バス停でも、人々が話していることや関心を示していることを何でも描きます。でもマンガ本の場合は、私の子ども時代のカンポンの場面を描いて、子どもを登場させます。今の世代の子どもたちに、彼らの両親や祖父母が、今とは違う時代を生きてきたことを伝えたいからです。マレーシアは30~40年前と今では全く違います。昔のことを繰り返すことはできませんが、子どもたちは自分たちの出自について知るべきです。そうすれば年長者をもっと好きになるでしょう。

フリーのマンガ家になることは日本で知りました。1981年に初めて来日したとき、新聞社のために働かなくてもマンガ家として独立して自営でやれることを知ったのです。サトウサンペイさんや馬場のぼるさんや手塚治虫さんなどとお会いしましたが、皆さんフリーでした。一方の自分は、マレーシアで新聞社のために働いている。そこで、「マレーシアに戻ったらサトウサンペイのようになりたい」と思いました。旅行から戻って数年後に、新聞社をやめ独立しました。そのときは最初の娘ができていましたから、少しギャンブルをするような面がありましたが、非常に意味があることだと思えました。そのときから現在に至るまで、私はフリーのマンガ家として人間を描いています。

小倉 デ・シルワさんはとても勉強家だという印象を受けます。大学に入る前に完璧に歴史の本を読んで、英語も極めたという話を聞きましたが、それは自分自身の意思でしょうか、それとも先生やご両親の影響でしょうか。

デ・シルワ 指導を受けたせいではなく、自分の性向の問題でしょう。歴史に興味があったので、歴史教育で評価の高い学校で教育を受けました。その学校の創立者はスリランカの歴史学者で、彼の生徒の一人も歴史学教授として高名な人だったので、その後続く人材をすぐに輩出すべきだという雰囲気がありました。それに成功したのは、私自身が歴史の勉強に興味があったからだと思えます。当時のスリランカの学生たちは、経済学やエンジニアリングや医学を専攻するよう勧められていましたが、私はその誘惑に屈服しませんでした。大学に入学したとき、歴史を読むという唯一の目的を抱いていました。幸運だったのは、当時のスリランカの大学では、世界でも一流の教育を受けられたので、国外の人々とも競合できたことでした。

卒業してロンドン大学に行くと、2年間で博士号を取りました。私について数歳年上の監督者は、戦時中の自分の行動について話してくれました。インド北東部の状況や、モンスーンとの闘い、マウントバッテンのような士官と会ったこと、士官たちの身綺麗な格好を見て、びしょぬれの軍服を着せられていた兵士たちが反乱を起こしそうになったことなどです。当時一緒にいた別の人は、政治学が専攻でしたが、彼が話してくれたのは、自分がマウントバッテンのために公文書を書いたということでした。マウントバッテンは自分では決して公文書を書かず、彼がマウントバッテンの言

葉を聞いて公文書を作成したというのです。そういったことを知り得たことも、イギリスで学んだ利益でした。

小倉 張芸謀さんは「紅」が好きだとおっしゃっていますが、作品を作るモチベーションの中で、赤い色には何かがあるのでしょうか。

張 「紅」は私の故郷では特別な色で、結婚や葬式など多くのお祭りで、大量の赤い色が使われます。だから赤い色は、小さい頃からの記憶になっていて、監督になってから衣装を選ぶときも、知らず知らずのうちに赤を選んでしまいます。赤い色が好きだし、女性が赤を着ると綺麗だと思います。映画の中でも、できるだけ赤い色を撮りたいと思っています。とても綺麗だと思うからです。だから私の初めての映画から今まで、赤い色は最もよく使う色になっています。『紅いコーリャン』『紅夢』をはじめ、撮り終わったばかりの新しい武侠映画『英雄』でも赤い色を多く使っています。『英雄』の衣装は、黒澤明と『乱』と一緒に仕事をした日本の有名なファッションデザイナーのワダエミさんをお願いしました。ワダさんは、とても真面目な方です。私たちが撮った時代物は1700～2000年前の物語ですから、赤い色や布は特殊なもので店には売っていません。そこで彼女はイギリスや日本からたくさんの染料を持ってきて、北京の郊外に小さな工場を見つけ、ひと夏中そこで布を染めていました。暑いし、すごく嫌な匂いがするのですが、私に一種類の赤色を選ばせるために、彼女は百種類以上染めてくれました。『英雄』の色は、すべてワダさんの手で染め上げたものです。彼女はオスカー最優秀衣装賞を取るべきだと、私は思っています。

小倉 先程、リードさんがおっしゃったことに関して、要するにアジアとは多様性をもちダイナミックなものといえますね。こうしてアジアの広い地域の方々が一堂に集まると、それを感じます。リードさんは、フィールドワークでアジアの交易の時代を研究されていますけれども、交易の人の移動はダイナミックなエネルギーをもつものであり、島と大陸部が渾然一体となったダイナミックな動きは、アジアの将来を決める大きなエネルギーになるのでしょうか。

リード 二つのことが言えると思います。一つには、アジアのほとんどの地域で、発展の遅れを埋め合わせるだけの蓄えがあるという大いなる感覚があることです。アジアは20世紀半ばに至るまで支配を受け、近代性への対応をゆがめられてきました。追い付くためになすべきことが大きいわけですが、ほとんどのアジア人は追い付くことができていると感じていると思います。そのための時間は必要ですが、世界の他の地域にあるような諦めや絶望感は見受けられません。アジアのどこでも「我々にチャンスを与えよ」といった感覚なのです。だからダイナミズムやエネルギーは確かにあると思います。それはアジアのいたるところで見受けられます。

もう一つ、アジアでは階級制度が他とは違った働きをしているように思えます。一般化するには無茶なレベルかもしれませんが、アジアの最近の歴史を見てみると、ひとつの仮説が出てくると思います。それは植民地時代を知る人々が「教育さえ受ければ自分たちにも先導できる」と考えるようになったことです。確かに階級制度はどこにでもあり、その階級差が非常に大きいところもありますが、教育があればやれるという感覚が広く普及しています。だから確かにダイナミックだと思います。政治が爆発せず、混乱が生じない限りは、このダイナミックな動きは存在していると思います。

小倉 ラットさんに最初にお会いしたとき、マレーシアにおける日本企業の公害問題について話し、自然環境は非常に重要な要素なのだとおっしゃっていたのを覚えています。アジアだけではなく、我々人間は自然をずいぶん壊しましたね。

ラット 私が子どもの頃にカンボンに起こった変化は、自分たちでどうこうできるものではありませんでした。錫とゴムが当時のマレーシアの最大の輸出品だったので、村の周囲に錫鉱が掘削され、私が絵に描いたように土地を飲み込んでいました。ゴムの樹液採取も行われていました。それから錫鉱業もゴム産業も大幅に衰退し、工業化が拡大されていき、工場が立ち並んで周辺の土地を覆っていきました。

私はただ見たままを描いているだけです。私たちの生涯における多くのことは、ただ見つめているだけで他にどうしようもないことなのです。自分の身近な周辺を見渡して、それについてコメントをしていこうと思っています。マレーシアがどれほどグローバル化しようとも、私はささやかな近隣を見つめていくつもりです。

小倉 デ・シルワさんは歴史家であると同時に、スリランカで起こっている民族紛争の調停者でもあると思います。21世紀はテロの時代だと言われていますが、人類はずっと昔からテロをやって殺しあってきました。デ・シルワさんが学校訪問をしたとき、学生から「テロはなくすことができますか」という質問が出ましたね。

デ・シルワ テロリストのアピール力を弱めるためには、社会的変化や経済的变化や政治的变化が必要です。本当に難しい問題ですが、我々の地域、特にインドではテロへの対処はテロに対する報復であると信じている人々がいます。インドの専門家の中には、解決方法の例としてパンジャブで行ったことを挙げる人もいますが、私自身はそういった議論は受け入れ難いと思っています。私は小倉先生のおっしゃる調停者になったことはありません。1987年と1988年にスリランカ政府のアドバイザーを務めました。その後はその役割を担うことはありませんでした。私にとってはむしろむなししい業務でしたが、それはスリランカ政府のせいではなく、インド政府の要求のせいでした。

現在、タイの保養地サタヒップでスリランカ政府と反政府武装勢力であるタミル・イーラム解放の虎(LTTE)の間で三回目の和平交渉が行われていますが、勇気づけられる兆候も出てきております。私の目から見れば、以前の二回の会談はアマチュア的だったと思います。交渉の前に重要問題について討議さえしていませんでした。今回の交渉ではプロフェッショナリズムのレベルがかなり高くなっています。和平交渉事務局があって、交渉を担当する閣僚が三人任命されており、そのうちの一人は私の個人的な知り合いで非常に有能な人物です。彼が一貫して私に言っていたのは、この交渉は数年かかるということでした。北アイルランド出身のジョン・ダービーという友人は、彼の著書の中で「民族紛争の交渉は山登りに似ている」と言っています。全体のプロセスは長い時間がかかりますが、和平交渉で実際的なアプローチが取られていることを私は嬉しく思います。あまり多くを期待しすぎはいけません。ジャーナリストや外交官が何と言おうと、問題にひとつひとつ対処していかなければなりません。インドのカシミール紛争は、すでに50年以上過ぎていますが、いかなる解決策もあまり期待できません。インド北東部の問題も解決は期待できません。中東については触れないでおきましょう。最近の明るい話題といえば、バルカンでの調停と北アイルランドで

の和平交渉ですが、これらはすべて長い時間を必要としています。これがサタヒップに関しての私の見方です。

小倉 アジアやアフリカでは、各地で分離独立運動が起こっています。先日のサタヒップの会議では、スリランカの中でもタミル人の分離独立ではなくて、自治区を認めようという問題が具体的に出てきましたが、デ・シルワさんはどうお考えですか。

デ・シルワ 1980年以来、こういった地域すべてに、ある程度の自治権が与えられています。自治に関しては何の問題もありません。問題は分離独立主義です。サタヒップから何らかの明るい徴候があるとしたら、LTTEが独立よりも自治により関心をもつと発表したことです。しかし、この問題を10年、15年と研究している私たちは、過去にもそういった発言があったことを忘れてはいません。楽観的でありうる理由があるとしたら、主要国が「スリランカにおけるタミル独立国家は、インドに影響を与えるがゆえに認められない」という立場を明確にしている点です。インドに分離独立主義を波及させてしまうからです。米国は、約15年間で初めてスリランカの状況に関心を示し、交渉の前にLTTEに対して、「分離独立国家はありえない」と数度にわたって断言しています。国際社会が分離独立を認めないという意見であることは明白です。

先ほどお話にあった自治区は、非常に資源の乏しい地域です。数世紀にわたって、スリランカの中でも後進地域だったところですよ。だから早期にその地区を復興するという考え方は、最初から実現の見込みのないものです。復興には非常に長い時間がかかるでしょう。問題は自治ではなく、資源不足なのです。

小倉 皆さんにお尋ねしますが、皆さんが考える「創造性 - クリエイティビティ」とは何でしょうか。

ラット 私はエドワード・デ・ボノ氏に会ったことがあります。彼は水平思考の専門家で、彼が言うには「創造性という言葉は、常にアーティストと結びつけられてきたが、それは本当ではない」ということでした。理由は聞きそびれましたが、私はアーティストが芸術作品を創作するときには創造性を用いているのだと思っていました。

私たちの世界のように、多様性があるって数多くのタイプの人々がいる場合は、仲良くなる方法をたくさん考えて、人々が全体としてまとまった方がよいのです。私たちは、つい自分が何者であるかを忘れてしまいがちですし、私はよくそういった経験をします。ニュージーランドに行ったとき、小さな町のホテルで、地元のマオリバンドの一員に間違えられたことがあります。テネシーのナッシュビルに行ったときは、私が「マレーシアから来た」と言うと、「マレーシアはアラスカにあるのか？」と言われました。私たちは皆違っていますが、一緒に集まるととても面白いわけですよ。お互いに理解しあって友情を築くときに、自分たちの中にある創造性が必要なのだと思います。

リード 私にとって創造性があるということは、勤勉であるということです。自分自身が生涯において創造的であったことがあるとすれば、それは難問に取り組んだことだと思います。簡単な道を選ぶという誘惑に打ち勝ち、大きな問題に取り組もうと自分で決め、大変難しい問題を選びました。

自分が創造性について理解しているかどうかはわかりません。自分がミケランジェロやラットさんのように創作できるようになる日は決して来ないでしょう。私にとっての創造性とは、あまりにも困難なので、むしろやりたくないと思うようなことに取り組むことなのです。何かを理解しようとし、それについてより多くを読もうとし、それがそれほど難しく感じられなくなるまで学び続けることが、創造的であることなのです。

デ・シルワ 私もリードさんの意見に賛成です。創造性とは勤勉である能力の反映であって、自分を邪魔するものに対して立ち上がる能力の反映です。南アジアでは、大学制度や官僚制度などに完璧な効率性が求められ、創造性を十分に発揮できない面がありますが、その一方で、映画産業のようにこの完璧な効率性が機能しない分野もあります。人々の生活に大きなウエイトを占めるインドの映画産業界は、この創造性の追及に本当に厳しい戦いを強いられてきました。

私にとって創造性をもつということは、非常に勤勉であるということです。だから創造性のある人は、世界の多くの地域で全然人気がないのです。例えば歴史書を書くということは、障害に対して身を粉にして取り組むことであり、それに立ち向かう能力が自分を創造的にするのです。

張 創造性に最も重要なことは、独自性あるいは個性だと思います。人と違うことです。私たちアジア人が作るあらゆるものは、アジアの特徴を持っています。アメリカともヨーロッパとも違います。だから独特の感覚を持ち、アジア文化を保つことができます。努力家であっても、アメリカの真似をしていれば、やればやるほどまずいことになります。だからアジアの創造性は、まず独自の個性だと思います。これは世界でも必要なことです。世界は各種各様の音を必要としています。お互いに尊重し、学びあうことも必要です。ひとつの多元化した相互尊重の世界が、私たちの将来の方向だと思います。

小倉 民族の問題やナショナリズムの問題は非常に重要で、終わりのない努力が求められますね。

デ・シルワ ナショナリズムという言葉が出ましたので、インドのナショナリズムの問題全体について少し触れましょう。私は常にインドのナショナリズムは、根本的な失敗だと考えてきました。その原因は、イギリスが作り出したものを認識する能力がなかったことにあります。イギリスの統治政府は、インドの歴史全体の中で最大の帝国でした。数十年かけて、その権限の移譲が行われたとき、彼らはヒンドゥー教徒とイスラム教徒を和解させることができませんでした。インドの歴史の中でイスラム教徒が千年間も存在してきたことを忘れていたのです。そして、ネルーもガンジーも、イギリスの築いた統治政府をまとめておくことに成功しませんでした。彼らは言語や文化や宗教の何で定義するにしても、エスニック・アイデンティティの持つ大きな力を理解できなかったのです。スリランカでも同じですし、パキスタンでも同じです。幸運なことに、東南アジアは我々よりも問題にうまく対処しているようですが、私たちが自らの地域については教訓を学んだことにしましょう。この問題に関して、ヨーロッパ人からお説教されたくはありません。第二次世界大戦前の50年間は、ヨーロッパがあらゆる問題の中心地であったことを忘れないようにしたいものです。当時のヨーロッパは、今のアジアよりも民族紛争が多く、私たち東南アジアの人々が犯した罪よりも、さらに大きな犯罪がヨーロッパの人々に対して行われていたのですから。

小倉 よくグローバリゼーションということが言われますが、私に言わせればグローバリゼーションはずっと昔から起こってきたことです。グローバリゼーションの問題は、人間が生活を営む中で作り出したもので、非常に力強い勢いで私たちの生活に迫っています。アジアという地域の中で、それぞれのコミュニティを大事にしていこうと思えば、私たちはグローバリゼーションを防衛するのではなく、手を携えてチャレンジしていかなければならないと思います。21世紀は、おそらく非常に重要な世紀だと思います。会場の皆さんも、スリランカで起こっていることやイポーの変化などに関心を持っていただきたい。心の底からの交流をするためには、常に思いを馳せ、他人の痛みや悲しみがわかるようなコミュニティを培っていかなければならないと思います。

本文は、小倉貞男氏(中部大学国際関係学部教授)をコーディネーターに迎え、第13回福岡アジア文化賞受賞者の4名が一堂に会して語られた内容をまとめたものです。